

《書評》

W・M・ホートン『キリスト教は文明を救いうるか』(森井真・訳)

柳 原 太 郎

本書は Walter Marshall Horton: Can Christianity Save Civilization? Harper & Brothers Publishers, 1940 の全訳である。本書は、かつて同一訳者らによる共訳で社会思想研究会出版部から出版されたが、訳文を全面的に書き改めて、このたび(一九九二年)「中公文庫」の一冊として出版された。

「本との出会い」ということがある。評者は、本書を書店の本棚で——しかも文庫本の棚である——偶然発見し、入手した。それまで評者は、本書の存在を知らなかったし、原著者に対する認識もない。ましてキリスト教を含め宗教学の専攻でもない評者が書評を書くなどということは、学問のディシプリンを犯すことになるのかも知れない。しかし、こうなるには、それなりのいきさつがある。始めにそれを述べることをお許し頂きたい。

評者は、目下専門ゼミで学生諸君とともに中川剛「町内会」(中公新書)を読んでいる。そのなかで、契約型社会Ⅱ米国、秋序型社会Ⅱ日本との日米の市町村成立の基底をなす社会の類型化がなされている。この契約型社会は、WASP(アングロサクソン系白人のプロテスタント)の「聖書のみ」「信仰のみ」の自発的信条を持つ個人間の同意が基礎となり、それが原型となって成立する。神は、教会ではなく個々人の信仰のなかに生きていることが前提とされる。そうであるならば、R・N・ベラーらが試みた「公共哲学としての社会科学がもっとも開放したいと願っている……この社会科学と人文科学との境界」(「心の習慣」島菌進・中村圭志訳)を確かめることがここでも必要であるし、また種々の角度からそれはなされなければならない。さらに米国の大都市が

ホームレス、麻薬、人種問題等で悩んでいるとすれば、その病理解明の手がかりとしてホートンが追及しようとしている本書のテーマは魅力的である。

原著は、一九四〇年の出版である。訳者が文庫本として再出版にあたり、あとがきで「これだけ世の中が変わったのに、いくらなんでも古すぎるのではないかと。しかし読み直してみると、四十年前と同じように、いやある面ではより鮮やかに、この本は生きて訴えているのではないか。」と述べているが、取り上げている素材はさすがに半世紀の時代を感じさせるが、その予言をした事柄の半世紀後の結果いかんにかかわらず、なお、預言的文明論としての価値を損っていない。

著者W・M・ホートンは、一八九五年生まれのアメリカの神学者。ハーヴァード大学、ユニオン神学校、コロンビア大学卒業後、パリ、ストラスブール、マールブルグの各大学に学び、オペリン大学組織神学教授をつとめた。

本書の構成は、次のとおりである。

序・諸言・第一章 宗教と文化 第二章 キリストと西洋文明 第三章 東西文明 第四章 世界文明とキリスト教の倫理 第五章 世界キリスト共同体——キリスト教世界文明の核 および付説一、二から成っており、各章の始めには、その要旨が掲げられている。その要旨を参考にしつつ各章別に評者なりにまとめた内容の紹介をする。

序 本書は、著者が一九三八年十二月から三十九年九月にかけて行った講演、説教および連続講義をまとめたものである。三十九年九月一日、ドイツ軍がポーランドに侵入、第二次大戦が始まったが、まさにその日の朝、著者はシャトルの人民教会で本書と同じ「キリスト教は文明を救いうるか」と題して説教をしており、このような時代背景が本書に流れる文明に対する危機意識をリアリティに富んだものにしてている。

緒言 標題のことばの解説がここになされるが、それはすでに本書の内容にも踏み入っている。

一 文明を救うとは、「それを現状のまま維持する」とか、「それがかつてあったように回復する」ことではない。どのような宗教であれ、宗教が文明のある特定の体系的党派的支持者になることは、その文明がいかに優れたものであろうとも、つねに宗教

の死を意味する。そうではなく、文明の持つ不朽の価値を、ある新しい社会秩序のなかに持ち込むことである。文明の諸価値はそこで宗教的確信と献身との、ある至高の「対象」をめぐって再組織される。

このように文明を「贖い」、「甦らせる」という社会的使命は、他の諸宗教はどうであれ、キリスト教は避けて通ることは断じてできない。キリスト教の救いの福音は「贖い」の対象は個人だけではない。著者は、このことの詳細を第二章で述べる。

二 ここでいう「キリスト教」とは、現存するキリスト教諸教会を意味するのではない。墮落して救済を必要としているのは、世俗文明だけではない。体制化した宗教もまたすでに墮落しており、救われるために何をなすべきかを知らない。西洋文明が凋落し始め、破滅に瀕したときに、神の霊と力とはこれを救おうとしてそのつど文明のうえに注がれてきたが、神が用いた手段は、キリスト教国民のあいだに道德的関心と宗教的革新との生き生きした運動が現われ、それがまず教会のいのちを再生し、これによって世俗社会のいのちをも再生しようというものであった。というのは、体制化した宗教も、いま多くの苦難と試練に直面し、悔い改めようとの気分になっているからである。

三 シュペングラーは、「文明」と「文化」を峻別したが、ホートンは、それに拘らない。文明とは、生活を営んでゆくための手段と目的の双方を含む。そして、より重要なのは、精神的中心と物質的周辺との区別である。生活手段の集積が行きつくところまで行ってしまい、人生の究極の目的が忘れられている今日では、社会を破滅から救うものは、道德的と宗教的理想と手段を目的に従属させようとする断固たる主張以外にありえない。

このような調子で、著者は標題の解説に十六ページを費している。預言的であるとともにポレミッシュでもある。

第一章 宗教と文化 宗教運動は、(1)文化の未熟な状態 (2)文化創造の状態 (3)世俗化の三つの位相を通過する。この周期の第三相が宗教にとっても、文化にとっても危機的である。この相は、外部からの影響または内部の矛盾によって文化の宗教心が死ぬか、再生するかのどちらかになる。ところで、宗教と文化との関係は、必ずしも一定不変のものではなく、宗教はあるときは文化創造的であり、あるときは文化阻止的ないしは中立的である。著者は、本書で「宗教は過去においてときに文化創造的であったように、再びそのようでありうるかどうか」を論じようとするのであるが、それ以前の問題として、そもそも宗教は反文化的な諸力

の最大なもので「人民の阿片である」とする有力な意見のあることも著者は承知している。現に、世俗化こそ中世と近代を区別するメルクマールとさえなっている。しかし、この近代西洋の動向が非可逆的であり、将来の宗教と文化の関係を決定するものだとする仮説を論駁することは可能であり、また必要である。要は、世俗化現象を人類文化の主流とみるか、それとも特定の文化的周期の downward に向きつつある相とみるかである。

ところで、さきにみたように、宗教的な文化を世俗化さす諸原因には、内的なものと外的なものがあるが一般的にいつて高度文明における文化の衰退の原因は主として内的なものであり、原始社会では外的なものが原因となる。というのは、原始文化における社会構造は一枚岩であり、構造のある部分に起った変化が直ちに全体に及ぶ。他方高度文明では社会の構造ははるかに柔軟であり、組織の一部分の崩壊は他の諸部分の生長と適応とによって補整することが可能であるからである。しかし、外的原因による場合であれ、内的原因による場合であれ、文化の衰退は「心の喪失」に起因している。そしてこれの再生は、後代の付加物によって圧迫されてはいるものの、預言者の指導者によって埋没から抜け出し、新しい規範をその伝統のなかから見出すか、それとも自己自身の古い神々に見切りをつけ、他の文化からえられた新しい神の前に跪くかのいずれかである。第一の場合には、文化の再生は「ルネッサンス」か「宗教改革」であり、第二の場合には「改宗」ということになる。それにしても、内的であれ外的であれ、文化を救う道は実際には多種多様である。そこで著者は、抽象的考察よりも具体的事例により研究すべきであると、仏教、イスラム教、ヒンズー教等の主に東洋における宗教と文化の関係の歴史を検討する。ここで著者は日本についても六ページにわたって論及している。これについて、評者は他の箇所における日本についての言及とともにのちに論評するが、次の部分だけはここで紹介しておくたい。

日本における宗教の主流は仏教であった。それが一八六八年、国家神道がこれに替った。国家神道は、宗教ではなく忠君愛国の規範とされた。そして、この規範に反しない限り、神道(教派)、仏教、キリスト教等のあらゆる教派が、布教の自由を許された。このようなことは先例がないわけではない。古代ローマは公的な皇帝礼拝を命じたが、あらゆる私的密儀も黙許した。アメリカは民主主義という宗教を命じたが、その公衆道徳に反しない限り、いかなる形式の宗教的礼拝も黙許している。しかし「ひとたび宗教がこのように文化の周辺に押し込まれて、公的な諸問題に関係することを阻まれるようになれば、それはさらに慎しい部分に縮

みこんで、ついでには周辺からも全く落ちこぼれてしまうのだ。」

第二章 キリスト教と西洋文明 西洋文明の衰退を回復するに必要な宗教はキリスト教なのか、それとも宗教的熱情をもって宗教反対を説いたマルクス・レーニン主義か、ヘブライ的キリスト教神話に代る「二十世紀の神話」のローゼンベルクか、それとも「東洋の知恵」に立ちかえる必要を告げる不可思議な祭祀の見者たちか、これらは耳ざわりであっても西洋文明の友であるとするなら傾聴しなければならない。しかし西洋文明の最盛期に、その基本的性格と統一の理念を与えたのがキリスト教の伝統であり、それが繰返し内から更新する能力を証明したことを知りながら無視するわけにはゆかない。そこで西洋文明とキリスト教との関係をさきにみた文化周期説との関連を重点に概観する。

一 初代キリスト教とローマ文明 原始的宗教文化は、宗教と生活が結びついた「一枚岩的」性格を持っており外的要因に容易に屈服した。文明化するにつれ宗教と日常生活、聖なるものと世俗的なもの、「彼岸」と「此岸」の分離による二元論を發展させていった。したがって世俗の権力と特権は聖別を受けた。ところがヘブライ宗教は、原始宗教の特徴である宗教と生活との統一を失うことなく精巧な文化と文明を發展させた。しかもそれは変化する環境に自己を適応させ、外的要因に対する特異な抵抗力を保った。また、イスラエルの神は〈選民〉といえども律法を犯す者を罰し、奴隷にするなど権力者、特権者に対しても厳しい批判者であった。イスラエルの神は悪の諸力と戦い歴史の全過程を榮ある究極の完成に導きつつねに歴史のなかに働いている。これは、たとえばパレスチナのシオニストによって建てられた純粹なユダヤ国家であっても例外でありえない。著者は、まず、このようにヘブライ宗教の特質を強調したのに初代キリスト教とローマ文明との関係の考察を行なう。

ローマ帝国は初代アウグストス始め後継者たちも反逆さえしなければヘブライの宗教に無関心であった。ローマ文明が文化周期の第三相に陥り、アウグストス自身も宗教改革の必要性を認識したものの、それは伝統的宗教の復活であり、ローマ帝国の正統性主張のための皇帝礼拝を中心とする人工宗教であった。ところでイエス出現以来、ヘブライ宗教は、地域的民族的特殊性を克服し、ローマ帝国の圧迫にもかかわらず、ローマでも信者は増えていった。衰退しつつある宗教が、死をも恐れない若く力強い宗教を迫害してみても成功するはずがない。ローマがそれに気付いたのはコンスタンティヌス帝になってからであった。かくしてキリスト

教は、自らの文化を第一相から第二相へと踏み入る道を開いた。

二 東方正教とビザンチン文明 コンスタンティヌスはキリスト教にローマ文明の救済を訴えた。しかしこれに対する教会の応答は鈍かった。ローマの罪を批判するのみで建設的改革のための情熱を失っていた。つまり教会は社会的特権と政治権力をえていたからである。そこで急進的キリスト者は、教会内の教会——修道院運動を始めた。

東方正教会は、ローマ帝国の東半分のヘレニズム的東洋的文化を変革しないでそれを是認し保存した。このことをプロテスタントのハルナックやカトリックのドーソンは批判するが、同時に彼らはそのなかに純粹なキリスト教的な精神が脈打っていることも認める。そうでなければ、トルストイ、ドストエフスキー、ベルジャエフらを説明することはできない。しかし、いづれにしてもそれは静止した進歩のない文化であり、アツシジの聖フランシスコによって完成した西方型のようにより活動的、社会的ではありえなかった。

三 ローマ・カトリック教会と中世封建制度 ローマ帝国の西半分では、教会はローマ帝国の早期の崩壊と北方蛮族の殺到のためにその教化の役目を否応なしに押しつけられた。そして殉教的なこの教化伝道は、三世紀までに「キリスト教文明」なるものをヨーロッパに確立した。しかしその土台は北方蛮族の法律や習慣の上に置かれていた。キリスト教はそれらのうちの宗教的拘束をできるだけ拭い去り、世俗化するとともにキリスト教の目的と両立しうる限りこれに是認をあたえた。そして封建制度の政治的結合の弱さと相まって当時のヨーロッパは教皇制度を中心に統一された。

しかし、中世カトリック文化はビザンチン文化より速かに第二相から第三相に、創造性から無力さと世俗性へ移っていった。これはその文化がより動的で進歩的であったからである。もし彼らが東方正教会のように社会的責任を避けていたら、あのように現世慾と腐敗にさらされなかったであろう。カトリック教の失敗はヨーロッパにキリスト教文明を確立したのち教皇がその地上的権力を市民的権威に引き渡さなかったことによる。あらゆる権力は腐敗してゆくが、絶対的権力は、絶対的に腐敗してゆく。宗教裁判所による恐怖政治と弾圧が出現する。こうして西洋文明がその文化周期の没落の相から逃れうる道は、ローマの権威に対し反抗することであった。

四 プロテスタントイズムと近代文明 近代文明はその初めから現在に至るまで、種々の破片や断片から成っている。ルネッサ

ンスの自然主義、プロテスタント宗教改革のヘブライズム、カトリックの反動宗教改革運動のキリスト教的ヒューマニズムのれ何も限られた領域以外に支配力を振ったことはない。近代前半においてはプロテスタンティズムはこの三者のうちで貢献度は最も少なかったが、近代後半において一部は歴史の偶発事でもあったが近代産業主義の性格を非常に大きく決定した。それは石炭と鉄による十八世紀の産業革命がプロテスタント教国の英国に起り、その結果が同じプロテスタントのアメリカに現われたということである。しかしこの偶然以上に本来資本主義と機械の進歩はピューリタンの源泉から発したものである。

カルヴィニストとピューリタンの「現世禁欲」がどのようにして資本蓄積と近代工業の発達に通じたかは、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」が説くところである。では、近代固有の「進歩の観念」そのものはどうであらうか。これはルネッサンスのプラトニストたちによって守られたギリシアの数学的分折の技術と至福千年の到来を夢みできたプロテスタント少数派の抱く新天地のヘブライ的希望の双方に由来している。プロテスタンティズムは、近代文化創造の初期においては決定的な役割を果たしたが次第に無力な要素となり、いまや現代文明を支配するに至った世俗勢力がネメシスの定めた方向に真しぐらに進んでゆくのを傍観しているばかりである。

アメリカ文化についても事情は同じである。植民地時代、プロテスタンティズムはアメリカの市民的社會制度と独自の風俗習慣を形成する支配的な力であった。十八世紀以降、教育と政治の支配はますます世俗勢力の手に移っていった。プロテスタンティズムとアメリカ文化との関係について画期的な事件は、独立宣言と合衆国憲法である。この両者は明らかに宗教的文書であったが、こうなれば、もはやプロテスタンティズムのそれではない。単純化され、なかば世俗化された理論ともいえるべきものである。この理論の信条は、多種多様な信条の人びとが一致しうる共通の地盤を準備した。公立学校で子どもに教えられる宗教は、十八世紀の自然宗教——一つの宗教的信仰にまで高められた個人主義的民主主義——であったといつて過言でない。ピューリタンが神の栄光を追求することと「幸福追求」とでは大きな差があるけれど、さらに幸福の手段が目的になってしまつては世俗化そのものである。アメリカのプロテスタンティズムが衰退の唯中にあることは議論の余地がない。プロテスタンティズムも東方正教やローマ・カトリック教同様、文化周期の作用を免れえない。宗教的革新なくして近代西洋文明も同様に捨てられる運命にある。

カトリシズムが中世封建社会の必要に応え、プロテスタンティズムが発生期産業主義に応えたように、新しい時代の要求に適し

た新しい様式のキリスト教の出現が期待される。それは、おそらくプロテスタントとカトリックとの伝統が結びつくことになる。しかし、もしキリスト教が自己改革に失敗するならば東洋の宗教が西洋に代ってなすかも知れない。宗教や文化が復活するときは、何らかの内的および外的要因の相互作用から起るからである。西洋にとって外的諸要因がいかに大きいかを次章以下でみる。

第三章 東西文明 キリスト教にとって近代西洋文明を救うということは、普遍的權威のある一つの精神的中心をめぐって世界文明を再組織することを意味する。というのは、西洋文明の侵透により全世界がひとつになってしまっているのだから。かつてキリスト教が古代地中海世界に対して行なったことを近代地球世界に対して行なうことになる。

一 西洋の拡張と東洋の反動 一四九二年以来のヨーロッパの拡大は、当時存在した七つの文化圏を総括的な一つの文化圏に変えてしまった。新大陸の発見と植民（一四九二——一七七五）、経済的帝国主義（一七七五——一九〇四）、革新的近代化（一九〇四以降）という三つの継続した時代に、西洋文明の東洋文明に対する影響は増大した。カトリックの伝道が「発見と植民の時代」に、プロテスタントのそれは「経済的帝国主義の時代」にそれぞれ成功をおさめたが、同時にもたらされた西洋の物質文明が伝道や博愛事業を追い越し、結果としては破壊的にはたらいた。それに伴って東洋の抵抗が始まる。しかし、このような関係は「教う」という命題とは程遠い。

二 西洋化された世界における原始文化の運命 原始諸民族は西洋化によって今世紀の初めには消滅に追込まれるとさえ思われた。しかし今日では一部の地域ではそのなから立ち直りがみられる。たとえばニュージーランドのマリオ人は西洋化の波のなかで自然力に対する親愛関係、血縁による仲間意識など西洋文明が見失って取戻さなければならぬものを維持している。

三 西洋化された世界における東洋文明の運命 東洋の偉大な「中世」文明はたしかに将来の世界文明に対して大いに貢献すべきはずのものである。しかしそれも現在では混乱の状態にあり、その内部の均衡を回復しようとするもの狂いの試みをくわだて、侵入してくる西洋の影響に対し乱暴に反発している。そして著者は、その具体的状況をイスラム教の近東、ヒンズー教の中東、そしてシャム、中国および日本について論及する。

第一章で仏教とのかかわりで論ぜられた国家神道が、ここではキリスト教との関連で論ぜられる。

日本は、一八六六年、開国して西洋文化を取り入れたが、明確な基準をもってそれを取捨選択をした。その基準としたものが国家神道の伝統である。それは軍国主義とまでいわないにしても圧倒的に国家主義的である。他の文化的要素はこの中心に反する場合には、徹底的に改造され、または追放される。しかし「疑いもなくこの無類の宗教的国家主義は世界文明に対して何か貢献すべきものをもっている——但しもし転向できるならば！」

さて、キリスト教との関連でみると、中国では有望であるが日本では困難である。日本のキリスト者は神への忠誠と近代国家の絶対主権とを両立させねばならない。その困難は、ローマ皇帝に対して本当に心から忠実でなかった初代キリスト教徒たちの知らなかったものである。「日本国民の現在のひとりよがりが何か内的な危機によるにせよ、未曾有の敗戦によるにせよその中心が不確かになり再び模索に悩むようになったときにのみ、その時にのみキリスト教は日本における偉大な文化創造の機会をもちうるし、日本文化は世界文化の一部となりうるであらう。」

総体的にアジア大陸とくに中国の真の問題はキリスト教と共産主義のあいだにあり、それらの力が東洋文化の古い型に同化してこそ地球的文化の一部となろう。

四 近代西洋文明の矛盾——全体主義かキリスト教か 西洋文明は、東洋文明を分解したり再組織した後、いまではそれ自身の内的矛盾のため崩壊し始めている。工業国の都市生活の混沌した騒音と混乱の光景をアリストファネスが見たならば、当時のアテナイ人の生活への批判を倍にして「ゼウスを追い出して以来、混沌が王である」と繰り返すであらう。共産主義、ファシズム、ナチズムは西洋主義の危機の徴候であり、それを回復しようとする気違いじみた試みである。しかしそれらは真理と正義に対する度しがたい相対主義のゆえに、世界文明を建設することは断じてできない。キリストの時代以来、世界史のなかで宗教と文化の均衡がこれほど不安定であったことはなかった。キリスト教にこの回復は可能であらうか。「もし東洋の宗教が必要な橋架けをしてくれる目標を提供することができるなら、この危急のときに当り表に出て救いの言葉を語ってほしい。しかしキリスト教信仰は、全く新しいことばは必要でない。神のことばはすでに発せられ、それは絶えず否定されて十字架につけられながらもつねに新しい生命に立ち返りつつ歴史のなかにくいこんでしまっている。キリストの近代の十字架はまだ完了していない。」

第四章 世界文明とキリスト教倫理

一 文明と倫理

文明の構造に占める倫理的要素の重要性を アルベール・シュヴァイ

ツェールがその著「文明の哲学」で指摘した。彼は、シュペングラの西洋は没落しつつあるという意見に同意しながら、それを治癒不能の生物学的老衰とみないで、治癒可能な道德的頽落に帰している。この治癒の鍵概念は「生への畏敬」である。彼は、世界が意味にみちており、生きることはいくことだと結論づけるヘブライ的キリスト教的伝統に立ちながらも、東洋のたんに世界と人生を肯定するだけでなく、その肯定をかつてアツシジの聖フランシスコが考えたような、人間の領域の彼岸にまで拡張しようとする思想がつねに流れていたことを重視する。キリスト教徒なら「人格への畏敬」というところを、ジャナイ教徒ならアヒムサ（不殺生）といい、仏教徒なら「生きとし生けるものの幸福」というであろう。「生への畏敬」は確かに東西の倫理的伝統の間隙に架橋し、東西両洋が一緒に立ちうる普遍的な文化を作る助けとなる原理である。シュヴァイツェールは、文明と対決する倫理的問題は扱い始めたばかりであることを認める。しかし、今日において宗教は、互に衝突する諸価値と忠誠とを、ある抵抗しがたい原理に従って理解可能な秩序にまで整理できなければ、世界文明を組織する中心とはならない。キリスト教はこれを解きうるであろうか。

二 ヘブライ的キリスト教伝統の倫理的資源 キリスト教がこれらの現代の問題に直面するとき、その解決のための資源となるのは、なにか無謬の規則とか掟にあるのではない。まず、キリストの霊——慣習に対してはしばしば挑戦的で、社会に対しては創造的な——にある。次に、記録されている始祖の教であり、この教えは、キリストのなかに働いたし、いまもわれわれのうちに働く（創造主なる霊の意志）の貴重な表示である。その次が聖書の預言者と使徒であり、最後に聖書の高次の洞察をわれわれの高さまで引き下げて、その意味を特定の社会状況のことで解釈している掟や規則、さらに後世のキリスト者の理想がくる。つまりヘブライ的キリスト教的伝統の倫理的資源の列挙は、聖書の内容が完全に一覧表に作られ評価されて終るのではない。聖書はそれに続くキリスト教の歴史のうえに、それを裁きの方向を正しながら立っている。しかも、キリスト教はかつてプラトン、アリストテレスおよびストア派の教説から学び、それがいまではヘブライ的キリスト教的伝統の倫理的資源の要素となっている。世界が一つとなった現在、われわれの相続財産に加えて釈迦、孔子のほかガンジー、西田天香などの非キリスト教の聖者の教えから何らかの要素を付け加えない方がおかしい。

三 文明についての主要な倫理問題に対するキリスト教の在り方 世界文明の諸問題解決のための技術的な面は發明家、経済学者、政治家らの問題である。しかしそれには倫理的価値の共通の基準がなければならない。ここではキリスト教の倫理的資源を倫理的価値との関連において取り扱う。

著者は、この観点から、a 人間と機械 b 経済的正義 c 個人、家族、国家 d 国家主義と国際主義などの問題を個別に診断するのであるが、著者が本書執筆当時、第二次大戦が勃発するという生々しい問題と関連のあるdについてのみここでは紹介する。交通の発達、経済的相互依存、文化の友好的交換などにより世界が一つの共同体であるかのように思われた時期があった。へ神の国への暁であるかのような錯覚をしたキリスト者もあった。ところが「列強の合奏」は耳をつんざく不協和音になった。「人間共同体」、「人類」、そして「国際秩序」は事実というより憧れと化した。

国際連盟は、コスモポリタンの夢の所産である。ウイルソンその他の連盟の創設者たちは、キリスト教信仰に鼓舞されていた。しかしコスモポリタンの幻想にまどわされ、キリスト教圏域外の世界にもこれを及ぼし人間共同体の現存を仮定した。クレマンソーはその非現実性を批判した。むしろ、このコスモポリタンの画一性の脅威に敵対して現在の国家主義的挑戦が起ったのはそれに対する抗議であり、キリスト者としては共感すべきである。

国家主義には「自己表現的」「自己満足的」「自己主張的」の段階がある。イタリアおよびドイツが国家統一のために戦っていた時代は「自己表現的」であった。しかし、国家主義の非劇は、ひとたび自己表現すると他の自己表現を否定する自己主張に変わる。アメリカを含めた英語国は、すでに優越した地位に達したので自己満足的である。そして自己主張する国に対しては道德的な態度を装う。キリスト者はこの両者を曝かなければならない。そして發育不全の国際連盟から究極の連邦世界共和国への一步を踏み出さなければならない。

第五章 世界キリスト教共同体——キリスト教世界文明の核 キリスト教世界文明を持つとうとするなら前章で試みてきたようにその計画をたて、その基礎となる原理を考えぬくことが必要である。しかしそれだけでは充分でない。文化や文明は育つてゆくものである。そのために熟考し計画することは必要であるが、そのうえに生きた種子をまかねばならない。アウグストは、ローマ文

明再建のために新しい宗教を工夫したが失敗に終った。イエス・キリストは、新しい人間共同体の種子をまいた。それが芽を出しローマ文明を救った。キリスト教会の現状は、礼拝しながら待望している状態といえるかも知れない。教会人のなかには第一次大戦の苦難から新しい文明が生み出され、教会がその指導的役割を求められると信じた人がたくさんいた。しかしこの期待は裏切られた。明らかなことはわれわれの文明は自らの罪を悔い改め切っていない。そして世界を再建するのには大変革が必要であるというのである。

一 年長教会の当面の展望 年長のキリスト教諸教会の現状の展望は頼もしくない。その世俗性と分裂のゆえに、すべての教会は裁きのときである真夜中の時刻の直前までできている。いまキリスト教に代る「もう一つの宗教」がでてくるとすれば、それは国家主義という宗教である。しかしそれは迫害する宗教である。真に生命あるキリスト〈教会〉であるならば、いかに激しい迫害が迫ろうとも何も怖れないであらう。

二 年長教会のいのちにみられる復活の徴候 年長諸教会がこのように衰えているあいだにも（新しいキリスト教）はすでにそのなかに現われて、現代の要求と古来の伝統とを調和させ、この時代のなかに神が新しい不思議をおこなうことを信じている。その例としてスコットランドのアイオナ会に見られる個人の宗教体験の革新を目的とするさまざまなグループ運動（キリスト者細胞）、キリスト教的立場からの社会的経済的諸問題を解決しようとする運動（例えば協同組合の設立）、そしてナチに対抗したドイツの〈告白教会〉運動にみられる人間を超えた至高の献身の対象を求める人間の要求に応えることを目標とする運動などである。これらの諸運動は、何れも世俗化したキリスト教に活力を回復さすものであるが、それだけでは教会を分裂さすだけである。教会統一運動の発展が同時に必要である。——同意しうる点については一致、同意しえざる点については自由、いずれの場合でも愛、これである。

三 若い教会の勃興と世界キリスト教共同体の誕生 西洋の年長諸教会の革新によりもさらに重要なのは、東洋の若い教会の出現である。若いこれらの教会が一九三八年のクリスマスにインドのマドラスで年長教会と対等の立場で相会した。六十四か国と多くの民族の代表者が集りここに「世界キリスト教共同体」が出現した。初代教会が小さな集団からローマ世界全体に広がり、ローマ世界をその苦難の時代につなぎ合せたように、振り動かされている現代世界をもつなぎ合せることも考えられる。まさに「エキ

ユメニカル」な交りの再現である。

四 キリスト者の希望の差し迫った目標と究極の目標——歴史の危機と永遠の国 現代のような危機の時代には、世の終りがすでにきており〈永遠の神の国〉がすぐ附近にあるように思いがちである。たしかに〈神の国〉はこのような時代にはふだんより近くにあり、世界秩序は肅清される機会を迎えている。しかし、いまここで望み祈るべきことは即座の至福千年的な歴史の終りでなく、むしろキリスト教的な形式の文明を世界的規模で打ち樹てることを通じて、神の歴史における自己表示に決定的な新しい一歩を進めることである。だからといって「文明を救」おうとする軍事的、政治的、教育的等々の他の手段が本当にそのために貢献できるのならキリスト者はこれらの手段を支持し、同調すべきである。キリスト者の第一の関心事は、文明がその心で変容することであるが、物質文化に対して無関心であってよいのではない。キリスト者は、精神文化の再生と物質文化の再建の両者に役立つべきである。しかし、それはそれとして「本書の主要な目的は、宗教的悔い改めへの呼びかけを生ぜしめ、精神的復活の約束を提供することにある」ことに变りはない。以上が本書の要約である。

訳者によればホートンは熱心なキリスト者である。したがって、当然のことながら本書のなかでも神そのものに対する言及が随所にある。非キリスト者である評者としては誤りなきを期するため要約が冗長になり過ぎたようである。以下、若干のコメントを試みたい。

緒言で本書の標題の語句の解説がされたが、本書にはこの標題の焦点に迫るための幾つかのキイ・タームがある。「世俗化」もそのひとつである。世俗化とは、一般的には「宗教の社会全体に対する影響力の喪失」と定義される。世俗化とキリスト教との関係については、それが「真の」キリスト教精神への「忠誠」なのか、逆に「裏切り」なのかという神学的論議があるが（図説 世界の宗教大事典）、本書の立場は、明らかに後者である。著者の文化周期説によると世俗化はその第三相の姿であり、それは同時に文化の危機の時代でもあり、そのなかでキリスト教の再生を論ずることこそが本書のテーマであった。自己主張的国家主義の台頭は、宗教の代替物としての世俗化の産物であり、それは迫害する宗教である。本書でしばしば引用されるローマ帝国のアウグストの皇帝礼拝もまさにそれであり、そのなかから初代教会が生まれ、発展してきた。これが文化周期説のプロトタイプでもある。

これに対し、世俗化を積極的に評価する立場はどうであろうか。そのひとりとしてH・コックスを取り上げる。コックスによると、世俗化は、ギリシア思想の空間性とヘブライ思想の時間性との緊密関係解決のための中世的総合の産物である。空間的世界は、次元の高い宗教的世界、歴史的世界を低次元の世俗的世界とした。そしてこの区別をそのままそれぞれの機構とし、そのうちにある責任（たとえば病院、学校など）が教會的權威から政治的權威へ譲渡されることを世俗化と称した。文化的統合性の諸シンボルのなかから宗教的偏向が失われてゆくことである。したがって世俗化はひとつの過程であって事態ではない、しかし、それはもうほとんど後退することのできない歴史過程である（『世俗都市』塩月賢太郎訳）。

次に著者が本書でいう「キリスト教」とは、現存する体制化したキリスト教ではない。「かくありうるキリスト教」「こうなるかも知れないキリスト教」（緒言）である。本来、ヘブライ宗教が他の宗教と異なる点は、原始宗教と同じく宗教と生活の統一性であり、それ故にイスラエルの神は、歴史のなかに働く神であった。したがって「彼岸」と「此岸」の二元論は本来の姿ではない（第二章）。キリスト教が文明を救うとしたら徹底的に改革されなければならない。キリスト教は西洋だけの宗教ではなく人類普遍の宗教でなければならないからである。そして改革の一例としてシュヴァイツェルの「生への畏敬」を新キリスト教の倫理として強調する。これはまた東西の倫理的架橋をなすものでもある（第四章）。

ここで再びH・コックスに立ち帰る。彼によれば、世俗化は聖書（旧約）に起源がある。自然の魔術からの解放は天地創造に、政治のタブーからの解放は出エジプト記に、そして価値の神秘性の剝奪はシナイ山における契約、とくに偶像の禁止とともに始まっている。

さらに彼は続ける。魔術は原始民族のひとつの世界観とともいうべにものであった。藪やけだものたちは彼らの兄弟である。太陽神、川神など宇宙のかしこに座を占める神々は無数に存在したのであり、しかもその神と人間はともに自然の一部となった。ヘブライ的創造についての見解は、神から自然を分離し、そして人間を自然から区別した。創世紀の天地創造の説明は「無神論的主張」(atheistic propaganda)の一形式である。世俗的な人間は、自然を畏敬もしなければ報復もしない。彼に課せられていることは、自然に対して心を配り、これを利用することである。さらにコックスは、次のようにいう。「ハイデガー的思考が唱導している姿勢は、ある人々に対して、自然の前における敬虔さと、生命の最も初源的な営みに対する畏敬の念をもう一度呼びさます

ような働きをするかも知れない。……しかしこれは自然の非魔術化と政治の非神聖化に向う精神的傾向に逆行するものである。」つまり「生への畏敬」は創造と出エジプトの否定であり、原始文化への回帰以外の何ものでもないというのである。

この「生への畏敬」をめぐる論議は、わが国における「山川草木皆成仏」をめぐる論議（袴谷憲昭「批判仏教」）と重ね合せて興味深い。ここでは新約聖書のローマ人への手紙の「被造物は、実に、切なる神の子たちの出現を待ち望んでいる。」（ロマ八・一九）の内村鑑三の解釈を紹介するに止めたい。内村は、この「被造物」は、全宇宙か、人類だけか、人類以外の有生物全部すなわち「天然」の三つのうちの何れかを指しているが、前後の文意から「天然」と指しているとし「然らばパウロはここに天然物の深き望みと歎きとを述べたのである。彼らは今虚無（むなしき）に帰せられているが、それはもとよりみずから望みでのことではない。ただ人類墮落に起因を発して彼らに非運が臨んだのである。ゆえに彼らは、神の子たちの栄化とともにみずからもまた復興完成せんことを切に望んでいる。」（内村鑑三「ロマ書の研究」下巻）ここには原始文化（アニミズム）のかけらは見受けられない。人間と自然とのかかわりは、造物主たる神を介してあると解すべきなのだろうか。

その他、第二章に述べられた著者のキリスト教観から、コックスが世俗化の過程として説明した政教分離はどのように考えられるのか（著書が理神論として批判する公立学校における超教派の祈りも連邦最高裁判所で違憲とされた。）、全世界に世俗化を及ぼしたコスモポリタンと対決する国際連盟に代るエキュメニカルな国際組織——世界キリスト教共同体（第四章、第五章）は著者の思い入れが過ぎないかなど論評すべき部分も多々あるが、第五章の結論の部分は、まさしくキリスト教的である。「時は満ちた神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」（マコ一・一五）のあのイエスのことばはホートンのなかに生きている。この場合の「時」は、ナチのポーランド侵入という政治的というより文明的危機である。著者にとつては世俗化はここに頂点に達したとみたのであろう。そして危機のときほど神の国は近くにある。もちろん著者は、これは一時的な神の勝利であって「永遠の神の国」ではないと付言することを忘れていないが、この結論から逆に眺めれば、やや樂觀的と思われる世界キリスト教共同体も著者の画いた設計図として、そう唐突には感じない。やはり本書は文明論とはいいながら宗教の書なのである。

最後に、著者が日本について言及した部分についてコメントしておかなければならない。何よりも驚かされるのは、著者があの時点で、仮定としてではあれ日本の未曾有の敗戦を予想していたことである。予想というより預言といった感じに近い。ついでに、

中国についてもそうである。著者は、中国を救うのは共産主義かキリスト教のどちらかであるといっている。中国は第二次大戦後共産主義国となったが、ソ連の崩壊後、ヴァチカンが中国をキリスト教の最大の「空白地帯」として重視している。米国が中国に人権問題で圧力をかけているのは、かかる背景があるからだといわれる（日本経済新聞社「宗教から読む国際政治」）。

ところで戦後日本はホーントンの期待によく応ええたであろうか。これについては、一九四八年、日本政治学会創立記念講演会の講演草稿を加筆された高木八尺の「ビャードの示唆に基づく政治学、歴史及び文明の研究に関する一考察」なる論文（日本政治学会年報「政治学」一九五〇年度、所収）の結びの部分を用いてその答に替えることとする。

もし戦敗に傷ついたわが国民が、道義の力、精神の力「世界的信仰」によって自らを支え、西洋文明の根幹を攝取し、自国文明の再生を遂げ、再建の新たな道を進み得るとせば、新生命を生きる更正せる国民（リヂエネレート・ネーション）として危局に立つ世界文明の存続の戦に参加することとなろう。それは、西洋文明そのものにも漸く抬頭しつつある精神的更生の気運に一契機を供し、かくして、わが国民は、世界人類の文明の維持と前進に貢献することを得べきであろうと思われる。